



心が育つ瞬間～上甲 晃～

校長 田中 俊光

高い志をもつ人材を育てる「青年塾」を主宰される上甲晃さん(志ネットワーク代表)は、「心を育てる教育」について追究する中で、ある児童自立支援施設との出会いに大きな示唆を得たといいます。そこでは生活を送るうえでの環境整備や食事の支度、畑仕事等、額に汗して働く体験を通じ、子供自身が人間として大切なことに気付いていくという教育が行われていました。上甲さんは、著書の中で次のような話を紹介しています。

施設で飼っている牛が出産を迎えたときのこと。それは大変な難産でした。苦しみ暴れる母牛の姿に子供たちは動揺しながらも、先生の指示のもと、お産の手伝いをしました。子牛の足にチェーンを巻き付け、やっとの思いで引っ張り出したと思ったら、息がありません。子供たちが代わる代わる、一生懸命に鼻を吸ってやると、子牛はようやく息をし始めました。そのとき、一人の男子生徒が大声を上げて泣き出しました。子牛の命が助かったから、うれしくて泣いているのだろう……皆がそう思いました。しかしその後彼が書いた作文の最後には、こんな思いがつけられていたのです。

— 母牛が子牛を産むってということは、こんなにも痛くて、こんなにもつらくて、こんなにも苦しくて、こんなにも命がかかっているのかと、僕は初めて経験しました。お母さんが子供を産むってということが、こんなにも痛くて、こんなにも苦しくて、こんなにもつらいことだってことを、僕は初めて分かりました。僕の母ちゃんも、きっとこんな痛い苦しい思いをして、僕を生んでくれたはずです。だけど僕は、母ちゃんを何回も殴りました。母ちゃんを蹴飛ばしたこともあります。本当に母ちゃんに申しわけないと思ったら、僕はもう涙が止まりませんでした。—

上甲さんはこの話を受けて、次のように語っています。

「彼だって、母親を殴ることはよくないということぐらい、頭ではちゃんと知っていたと思います。けれども、カッとしたら、もう止まらなかったのでしょうか。頭で知っているだけではだめなのです。心に刻まれてはじめて、母親に対して「ああ、母ちゃん、申しわけないことをしたなあ、という気持ち

が生まれたのです。心が育つとは、こういうことを言うのです。(中略)人の苦労は、自分で体験してみればじめて分かります。人の苦労が分かればじめて、そこに思いやりの心が育ってきてはじめて、私は人間としての値打ちが上がってくると思っています。」

私たちの人生には、思い通りにならないことがたくさんあります。まったくの偶然で、原因の追及さえできない困難が降りかかってくることもあります。しかし、そんな事態に遭遇しても、取り乱したり絶望したりすることなく、次の一步を踏み出す力—それはこうした「心の成長」を経

てこそ得られるものではないでしょうか。周囲の人たちとの温かい「つながり」を感じる心。人の痛みを思う心。人の恩を感じる心。そこから生まれる感謝と思いやりの心……。自分自身がつらく苦しいときも、それを思い起こすことができたなら、人生を前向きに歩んでいけることで
(道徳を考える月刊誌「ニューモラル」平成31年1月号No. 593)
〈上甲 晃〉昭和40年4月 松下電器入社 昭和56年10月 財団法人松下政経塾に
平成8年4月 松下電器退社 平成8年5月 有限会社 志 ネットワーク社を設立

「言葉のチカラ」にあらためて目をむけてほしい～さだ・まさし～

シンガー・ソングライター／小説家のさだ・まさし さんをご存じですか？

さだ・まさし：1973年にフォークデュオ「グレープ」としてデビュー。以来「精霊流し」「無縁坂」、ソロ活動後も「関白宣言」「北の国から」などのヒット曲を世に送り出す。2001年には小説家としての活動も開始。コンサート回数は通算43,000回を超える。小説家としての著書に「解夏」「眉山」など多数。映画化もされた。

教育冊子「日本教育」の巻頭インタビューに、さだ・まさし さんの『「言葉のチカラ」にあらためて目をむけてほしい』が載っていましたので紹介します。

1 教育現場で愛情を言葉でどう伝えるか

— さださんは、^{こくがくいん}國學院大学のご出身で、教育者になられたご友人も多いそうですね。 —

ええ、地方の分校で教師をやっていた僕の親友がいます。彼が若い頃、悪さをする男子生徒を怒っても諭してもダメで、ある時に、その子と向き合って話しているうちに、**無力感を感じて自分のことが情けなくなって、涙がポロポロ出てきた。でもその子に涙を見られたくないので、とっさにパッと抱きかかえたらしんです。そうしたらこの子が一緒においおい泣きはじめた。**

その子が泣き止むのを待って、涙を互いに拭いて「もう一回、話をするから」と向き合った時に、その子は大きくうなずいた。以降、その子は分校を代表するリーダーになったそうです。「自分はつたない教師だけれども、どこにヒントが転がっているか分からない。どんな子の前でも泣いてみせれば理解されるとは思わない。ただ、**その子の胸を叩くのは『抱きしめる』という怒り方しかなかった**ことに気が付いた」と話をしていました。

その話を聞いて「お前もいい教師になったねー」とひやかしていたんだけど、彼は野球の指導もうまくて、分校の子供たちを全国大会まであと一步のところまで育てた。**「本校に勝ったぞ！」**と電話をしてきたのを、僕は**「吾亦紅（われもこう）」**という歌にしました。

— それはいい話ですね。 —

僕らは悪いことをすると叩かれた世代です。僕の友人の教師も「愛のムチ」として子供を叩いていたけれど、さすがにそんな時代はもう終わりましたし、叩くのが正しいわけじゃない。でも、自分の愛情を叩かないで伝えるとすれば、もっと日本語表現が上手にならなければならないと思います。「先生はなぜあなたにこのことを伝えたいか」を子供に理解できるように説明しないと。

2 大人が日本語の力を回復させるには

— 日本語の表現力が、子供も大人も低下・劣化していると言われて久しいですが…。 —

たしかに日本語の技量はいまどんどん落ちている。セクハラやパワハラも絶対にダメだけれど、「日本語が下手になった」という側面もあると思います。相手のスタンスが分かっただけで、こっちのスタンスを知らしめただけで、^{じょうず}上手な言葉遣いで言うジョークなら、相手を傷つけないし嫌な感じもしないんです。ところが、自分のペースで、自分が言うのは許されていると思込んで、一般的に嫌がられることを言うのは許されていない、ということになかなか気が付かない。一方で、相手のためだと思って言ったことが逆恨みを買うこともありますよね。受け取る側が理解できていないから「なんでそんなことを言われなきゃいけないんですか」となる。受け取る側が傷ついて、それに対する**逆襲**の仕方が偏執（かたよった執着）的になっている。これも日本語表現がうまくないから、**自分がなぜ傷つたかをちゃんと伝えられず、正統な抗議ができないので内側で爆発している**。本当に「物言えば唇寒し」の時代に入ってきたという感じがします。

ルーマニアの思想家シオランは「国語は国家なり」と言いました。**国民の日本語が下手になっていることで、日本国の輪郭がほころびつつある。**

— このままでは、国家の危機ですね。では日本語の力を高めていくためにはどうしたらいいのでしょうか。いまはとにかく大人になってから本も読まない、学ばないと言われていますが。 —

いまの大人が学ばないのは、**学校を卒業するまでに「自分の勉強」に出逢っていない**からなんですよ。僕は高校時代の恩師に「**学校は勉強しに来るところだと思っるのは間違い。学校で勉強する方法だけは教わって、卒業してからお前の勉強が始まるんだよ**」と言われて以来、いまだに僕は歌をつくりながら勉強しています。テレビのドキュメンタリーでちょっと心に引っかかる番組があったら、再放送を探して夜中にそれを観て、面白いものはすぐにネット書店でそのテーマに関する本を著者別で5冊は買って、目を通して見ます。

思うに、僕らの子供の頃のほうが、子供が**ちょっと背伸び**してでも読みたいと思う本があつて面白かったような。今時、中学生が中島敦や梶井基次郎は読まないと思うけど（笑）。

— そのような読書もさることながら、学校や家庭での日々の会話も大切ですよね。 —

親も教師も、子供にきちんとした日本語を話せなくなっているから、子供も当然話せなくなる。**子供が嫌なものは嫌だ**といって暴れちゃうと、**今度は大人が子供を怖がり、結果、向き合わなくなる**。すべてにおいて、言語感覚の狂いが日本をねじ曲げてきているのではないのでしょうか。

せつかくこの国に生まれ育った人間が日本語下手では、伝えたいことが伝わらなくなる。ことに初等教育における国語教育については、もうちょっとみんなで真剣に考えなければいけない。個人的には正しい日本語を話す「日本語会話」という授業をつくってほしいぐらいですね。そして、子供が正しい言葉を学ぶために、教師と親が互いをもっと理解し合う距離感でいてほしいなと思います。 （「日本教育」公益社団法人日本教育会）